



プロローグ 天使がつれてきた音楽の神様



地震にも 負けない

強い心を持って

亡くなった方々のぶんも

毎日を 大切に 生きてゆこう

傷ついた 神戸を

もとの姿にもどそう

支えあう心と 明日への 希望を胸に

響きわたれ ぼくたちの歌

生まれ変わる 神戸のまちに

届けたい わたしたちの歌

しあわせ 運べるように

あれは、阪神淡路大震災で神戸の街がぐちゃぐちゃになってから、約1カ月半がたった頃のことでした。

春まだ浅い3月上旬の一日。私は当時務めていた神戸市立吾妻あづま小学校の体育館で、震災でも生き残ったピアノを弾いて、何曲かの歌を伴奏していました。

この日全校生徒を集めて行われたのは「春を呼ぶつどい」。震災前からこの季節には、「春」をテーマにした歌を集めて音楽会を行うのが恒例になっていました。『早春賦』そうしゅんふ「春がきた』『どこかで春が』などを歌い、子どもたちと新しい季節が来たことを喜びあうつどいです。

でもこの年のこの音楽会には、もうひとつの意味がありました。

それは、1月17日の震災以降、家を無くし、家族を亡くし、生きる希望や夢などを見失いそうになりながら、懸命けんめいに生きている被災者の皆さんに春の歌を聴いていただき、希望を持っていただこうという思いもあつたのです。

ふだんは子どもたちの歓声や歌声が響く校舎内の教室も、まだこの段階では避難所でした。約800人も被災者が、この場所で食事して、この場所で寝て、この場所で1日を

過ごしていたのです。

体育館にも、まだ多くの被災者が生活していらつしやいました。ところが卒業式を前にして、被災者の皆さんが式のために、空いていた教室に移動していただきました。だからこの音楽会も、体育館で開くことができたのです。

そういう被災者の皆さんにも子どもたちの歌を聴いていただきたい。傷ついた心に春を届けたい、いつ自宅に戻れるのか、この段階ではわかっていなかった不安な被災者の皆さんに、一時でも安らぎの気持ちを味わっていただきたい。そんな思いから、私は震災で無事だった子どもたちと一緒に合唱の練習を重ねて、この音楽会に臨のぞみました。

### 歌詞はこみ上げ、メロディーは舞い降りた

この頃は、校舎の中に学校と避難所が併設されていたわけですから、学校としての課題は「子どもたちと被災者の共存」でもありました。

そのためにも、音楽会には被災者の皆さんにも参加していただいて、一緒に歌って気持ちをひとつにしていただこう、という思いもありました。音楽会の一番最後に、「さあ、



みなさんで合唱しましょう」と会場全体に声をかけて歌ったのが、冒頭に掲げた『しあわせ運べるように』という、私のオリジナルソングでした。

この歌の誕生の由来は後の章で詳しく書きますが、私自身も震災で自宅が全壊し、市内の親戚の家で避難生活を送っていたある日、突然生まれてきた曲でした。自分でも不思議な感覚だったのですが、歌詞は体の奥底からわき上がり、メロディーは天から舞い降りてきて、ものの10分もかからずにでき上がった曲です。地震をテーマに曲をつくろうなんて、それまで微塵も考えたことはありませんでした。毎日毎日生きることには必死でしたし、避難所となった学校では雑用に追われ、音楽に関することすべてが消えてしまった状態でした。

ところがある夜、ニュース番組に三宮の惨状が映り、学生時代に待ち合わせに使ったビルやさまざまな思い出が残る商店街が倒壊している姿を見た瞬間に、

——ああ、神戸の街は消えてしまった。もうおしまいや。

絶望の思いにとらわれた瞬間にこみ上げる思いがあり、歌詞が心の奥からわいてきて、思わず近くにあった鉛筆を手にとったのです。

あまりに大きな絶望と、それを受け入れなければ生きていけないちっぽけな人間という

存在。そしてふるさとが消えようとする大きな悲しみ——。

いま言葉にすれば、そんな人間の宿命のようなものを感じたのかもしれない。あるいは気分的には、映画『風と共に去りぬ』で「タラ！」と叫ぶスカーレット・オハラ的心情とでも言えればいいのでしょうか。

歌ができたときはまだ学校が再開する前だったし、被災からの回復状況もそんなに進んでいなかったのです。この歌がその後どんな運命をたどっていくことになるのか、どんな広がり方をしていくのかなどということは、まったく考えたこともありませんでした。そんなことを考える余裕もなく、避難した親戚の家と学校を往復しながら、ただただ毎日必死に生きているときだったのです。

### 「音楽の神様が聞いてくださっていますよ」

このつどいの一歩最後に、子どもたちと被災者の皆さんでこの歌を歌い上げ、ピアノの後奏のメロディーが体育館の高い天井に吸い込まれた直後、私のもとに近寄ってくる人がいました。



その人は、目に涙を一杯にためながら、私の手をしっかりと握ってこう言ってくださいましたのです。

「先生、この世に音楽の神という者がいるとしたら、この歌はきつとそばにいて聴いてくださっていますよ」と。

その方は、長い避難所での生活で、私にとってはとても気になる存在の方でした。震災直後に東京からやってきて、ボランティア・スタッフとしてずっと吾妻小学校の体育館で活動されていた方です。もちろんご自身も寝袋を使い、廊下や階段の片隅で寝起きする生活です。

震災直後の吾妻小学校の体育館は巨大な避難所でしたから、いろいろな方が出入りしていました。そのなかでもこの方は、いつも黙々と床の掃除とかトイレの掃除とか、だれもがいやがるような仕事を率先して行ってくださる寡黙で実直な方でした。避難所のトイレは、水が出ない間は汚物があふれて大変な惨状です。それを掃除するのは、私たち教職員でも尻込みする仕事でした。この方はおそらく30代の後半。きちんとお仕事のことを聞いたことはありませんでしたが、身なりからはおそらくサラリーマンでいらしたと思います。会社を休み、家族とも離ればなれになりながら、被災地のために、神戸のためにボラン

ティア活動をしてくださいましたのです。

その姿をかいま見て、私は日頃からひそかに尊敬の念を抱いていたので、余計にこのひと言が心にしみました。

——そうか、あるときは自分ではよくわからなかったけれど、この歌は本当に音楽の神様が力を与えてくれて生まれたのかもしれない。

16年の月日が流れた今は、そう思えるようになったのです。

### 子どもたちの歌声がキラキラと降り注いで…

思い返せば親戚の家のリビングでこの歌を書き留めている間、ほんのわずかな時間でしたが、私の脳裏には清らかな子どもたちの歌声が響いていました。

この曲に限りませんが、私がこれまで作曲してきた約300の曲は、どれも子どもたちや学校生活がテーマであり、変声期前の子どもたちの清らかな歌声で歌うと最も輝くメロディーになっています。

このときも、惨憺たる状況の神戸の街の上に子どもたちの歌声が光のようにキラキラと



降り注ぎ、何人もの天使が舞い降りてきてこの街の復興を祈ってくれている。  
そんなイメージを思い浮かべながら、そばにあったB4の紙の裏側に、せっせと鉛筆を  
走らせていた記憶があります。

あの日から今年で16年。あのとき誕生した歌が、今では国内では新潟の山古志村や今回  
の東日本の各地、さらに世界的にもベルシャ語、中国語、英語、フランス語などに翻訳さ  
れ、世界中の被災地で歌われる希望の歌になろうとは――。

自分では、この歌は自力で作詞作曲したというよりも、この歌の存在を知り、この歌の  
力を感じてくださった多くの皆様が、それぞれの力で育ててくれた歌という気がしてなり  
ません。

本書では、そのことを、感謝の気持ちとともに書きつづっていきたいと思っています。

子どもたちは天使です。

音楽の国からやってくるメロディーは、天使の歌声で響かせるのが一番美しい。

天使たちが逃げないように、私は子どもと正面から向きあいながら、音楽を通して「感

動できる心」を育てたいと思っています。

『しあわせ運べるように』はそんな日々の実践があったからこそ、あの未曾有の体験のな  
かでも音楽の神様を信じていたからこそ、生まれてきたものだと思います。

今回の東日本大震災で被災された皆様には、同じ被災者のひとりとして、深く深くお見  
舞い申し上げます。私は音楽でしか表現できない人間ですので、この歌を贈ることで生命  
への讃歌と、復興への願いとしたいと思います。

東日本の被災地に、

「しあわせ運べるように」

祈ってやみません。

2011年初夏

白井真